

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月31日現在

機関番号：35305

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2010～2011

課題番号：22820082

研究課題名（和文） 秋里籬島を中心とする、近世中期上方の文学と出版に関する研究

研究課題名（英文） Studies on the literature and the publishing at Kamigata in the middle of early modern ages, mainly on Akisato Rito

研究代表者

藤川 玲満 (FUJIKAWA REMAN)

ノートルダム清心女子大学・文学部・講師

研究者番号：20509674

研究成果の概要（和文）：

近世中期上方における、書物の形成の実態とこれを取り巻く文壇・出版界の動向を捉えるため、京都の作者秋里籬島の文学とその文芸圏について解明を行った。籬島作品に関しては、初期の小説について典拠に基づいた叙述の在り方を分析し、編集手法、作者の態度、出版物としての位置付けをその要因とともに明らかにした。文芸圏に関しては、同時代文学者の活動と編著の形成・出版事情を解明するところから上方文学の情勢の一端を跡付けた。

研究成果の概要（英文）：

For research on the actual situation of making books and the movement of the literary world and the publishing world at Kamigata in the middle of early modern ages, we investigated the literature and the literary environment of Akisato Rito. Regarding his early work, we analyzed the way of his description based on the sources, and found the technique of arrangement, the stand of author, and the status of its publishing together with their necessities. Regarding his literary world, we researched the activities of contemporary writers and the circumstances of publishing books and editions to verify the situation of the literature at Kamigata in the ages.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,210,000	363,000	1,573,000
2011年度	1,110,000	333,000	1,443,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,320,000	696,000	3,016,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：近世文学・上方・出版・秋里籬島

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、近世中期に上方から発して隆盛を見た函会作品の作者である秋里籬島を中心に据え、その属する文化圏における人的・文学的連繫を端緒として同時代の文学と出

版を追究するものであるが、これと関連した研究動向としては、(1) 近世中期作者の研究、(2) 近世後期小説の研究、(3) 出版研究が挙げられる。

(1) 近世中期作者の研究

作者秋里籬島に関しては、著作中の記述からはその伝記を殆ど知ることができない状況にあったために、従来には、著作内容から生涯を構想することや文芸活動の情報を見出していくことがなされてきた。これらを受けて報告者はこれまでに、同時代資料を対象として籬島の文学活動の事跡の蒐集を行い、これに基づいてその俳諧活動の閲歴の一端を明らかにしている。本研究では、こうした研究状況を端緒として、籬島と同時代の文学者たちとの繋がりに注視しながら、作者の文芸的基盤を明らかにすることが必要であると考えた。

## (2) 近世後期小説の研究

籬島は、安永年間から文化年間に著作があり、初期の小説類の出版は近世後期の上方読本に先立つ時期にあたると言える。報告者はこれまでに、『都名所図会』等の籬島による名所図会の諸作について、先行書物との対照調査を行い、これに基づき、手法的な特質の分析を進めてきた。こうした作品研究において、さらに他の著作についても、特に思想の面にも着目した調査分析によって作者の持つ文化的背景と著作の関連について解明することが必要であった。

## (3) 出版研究

近世書肆の出版活動や営業史に関する諸先行研究に連なるものとして、報告者はこれまでに名所図会の板元書肆である京都の吉野屋為八に着目し、本屋仲間の記録や板本の調査から、その出版活動を明らかにするとともに、作者秋里籬島の著述の環境、および近世中期に創業した書肆の在り方として、活動の特質を分析してきた。本研究では、これを発展させて、籬島および吉野屋と連繋する同時代京都・大坂の周辺書肆たちの活動状況を明らかにすること、そして上方出版界全般の動向に目を向けていくことが必要であると考えた。

## 2. 研究の目的

本研究は、近世中期の上方において書物が創出される様相を、作者を軸として、その文学的な活動基盤、および作品を取り巻く書肆・出版界の動向という環境的な事項の相関関係を分析していくことで追究し、文学と出版の在り方の一部を捉えようとするものである。文化の中心が江戸に移りつつある時代、上方において図会物の著作で文学・出版界に存在を示した作者の秋里籬島であるが、従来その文学が如何に形作られたのかという面の解明が尽されていなかった。本研究では、籬島を研究対象の中心とし、これらの著作が作者の文学土壌の影響を受け、あるいは社会

との連繋をもって成され、さらに時流に合う出版物として世に出される過程の諸相を多角的に分析することにより、この時期の上方の文壇・出版界の趨勢と傾向を考察することを目指した。

## 3. 研究の方法

本研究は、主として次の点を中心に調査・考察する方法で遂行した。

### (1) 作者の属する文芸圏と活動基盤

本研究の主軸となる、籬島の文芸圏・文学活動の基盤に関して、籬島周辺との繋がりに、あるいは近い位置関係が見出せる当代文学者の動きとその編著についても関連文献を網羅的に調査するところから活動の実態を明らかにし、これと文学者間・文壇との直接的もしくは文学内容上の相互連関を考証し、時代的な特質を見出すことを試みた。

### (2) 思想的背景（文化圏）と著作形成との関係

作者の文化圏と著作との関係性の点について、秋里籬島が浄土真宗本願寺派の信徒となっていると判明したことを踏まえ、初期作品の軍書で石山合戦を題材とする『信長記拾遺』を対象として、宗旨に関する叙述態度に着目し、これと原拠に基づいた小説執筆・編集の手法的特質とを併せて分析を行った。

### (3) 出版事情、上方出版界の動向

上記(1)、(2)の検討においては、当該の編著の出版事情にも重点を置いて考察する。板元書肆の側の状況や出版物としての意味と位置付けを明らかにし、これらの調査結果を併せ見ること、近世中期から後期に涉る、江戸に対しての京都・大坂書肆の活動実態と傾向を見出していく。

## 4. 研究成果

### (1) 近世中期京都の文学者と書物制作

秋里籬島の文学環境の周辺に着目し、活動圏や動向に重なるの窺える同時代の文学者とその編著の形成について調査研究を行った。秋里籬島の文学には、名所図会等の図会作品の著述の他に俳諧活動がある。また、籬島と関連の深い京都の書肆吉野屋為八の出版歴のなかには、寛政年間における俳人三居庵古音の編著が見出せる。こうしたことから、近世中期京都における、文芸圏の近い作者の活動の一端を見るべく、三居庵古音の伝記と編著の形成、およびその文学傾向について周辺環境とあわせて明らかにした。

古音は伊勢蕉門乙由の門人飛良の男であ

る。その学芸に関しては、俳諧の宗匠である  
旁ら刀剣の目利きを学んだ閨歴が明らかと  
なった。古音の編著と確かめられる書物を整  
理すると、如上の閨歴に基づく『俳諧秘事満  
津毛』（寛政3年刊）等の俳諧作法書と『古  
刀銘尽大全』（寛政4年刊）等の刀剣の目利  
き手引書の二種にかかるものであり、叙述内  
容には共通、連関する箇所が認められる。

これらの編著の出版は、初期のものには京  
都の田中庄兵衛（汲古堂）、のちに前述の吉  
野屋が携わっている。その制作・出版事情を  
探ると、板元の田中庄兵衛の側における先行  
類書の板権の所持状況とともに、蕪村門での  
俳諧活動もある田中庄兵衛の、多岐にわたる  
実用向きと言える開板書目の傾向が見出さ  
れ、このことが古音の閨歴と相俟ってなされ  
たものと考えた。

そして、田中庄兵衛と吉野屋とともに籬島  
の文化圏との関係については、報告者がこれ  
までに行ってきた研究成果と併せ見たとき、  
籬島は俳諧において貞門系の而咲堂練石に  
師事した後、蕉風復興運動に連なっていくが  
（拙稿「秋里籬島の俳諧活動」『近世文藝』  
78、2003年7月）、古音の父飛良には而咲堂  
との関わりが確かめられ、活動圏は同時代の  
京都俳壇周辺に捉えられる。さらに寛政年間  
における古音の編著の相次ぐ板行は、時代の  
俳壇情勢としての蕉風復興運動を要因とす  
るものと考えられた。

以上の成果は、従来未解明の点が多く残さ  
れたこの時期の上方文学者の活動の解明を  
起点として、これと周辺事物との連繫を見出  
す展開により、同時代俳壇の動静、特質の問  
題を考えたものと言うことができる。

## （2）著作の形成（『信長記拾遺』について）

初期の軍書『信長記拾遺』を対象に、籬島に  
よる小説作品について形成方法の実態解明と、  
そこで浮かび上がってくる特質の要因と意味を  
探る調査研究を行った。籬島は著作の隆盛によ  
り、この時代の上方作者としての存在は小さく  
ないが、従来その閨歴には不明な点が多かった。  
しかし昨今明らかになった伝記の一点に、浄土  
真宗への改宗が挙げられる。本作品については、  
このことを踏まえて著作の形成の在り方を捉え  
ていくことが重要であると考えた。

『信長記拾遺』は石山合戦を題材とし、織田  
勢と本願寺勢との戦いの顛末を描いたものであ  
る。そして、この作品と深く関わるのが実録の  
『石山軍鑑』（立耳軒著）である。『石山軍鑑』  
は、後小路薫氏「唱導から芸能へ—石山合戦譚  
の変遷—」（『国語と国文学』62巻11号、1985  
年11月）に作品の成立の経緯が明らかにされて  
いる。本研究では、まず、『石山軍鑑』を原拠  
とした『信長記拾遺』の形成の在り方について、  
『石山軍鑑』の受容の様相と、改変を加えて『石

山軍鑑』から乖離した点に着目して、その手法  
的特質を追跡した。その結果として明らかにな  
ったのは、合戦を描く構図の修正、中国の史話  
と兵法の挿入、そして人物設定に関わる改変で  
ある。

合戦を描く構図の修正に関しては、『信長記  
拾遺』では本願寺勢側の描写に焦点を定める形  
成の工夫がなされたと捉えることができる。同  
時に、この点については、小説としての本作の  
編集が後年の名所図会の手法と類似すること  
を見出したとも考えている。中国の史話と兵法は、  
軍術を説くという形で作品に統一的に挿入され  
た素材であると言え、これには漢籍の広く流行  
した時代環境のなかで読者受けする内容を取り  
込む意味があったと考えた。人物設定の改変と  
しては、顕如上人の描写を縮小すること、新た  
な人物の創作、本願寺勢の軍師をめぐる話筋の  
変化が見出され、これらは真宗史を語ることか  
ら引き下がる作者の立場、および『信長記拾遺』  
に虚構性を付与する意味があるものと捉えた。

そして、以上に見出された作品の特徴をふま  
え、これと前述の作者の伝記との関連、そして  
出版事情の検証を行った。その結果として、作  
者が見せる真宗をめぐる叙述態度に関しては、  
著述の環境、すなわち出版書肆を含む人的関係  
が宗派と繋がること、あるいは近いことの影響  
と考え得ること、また出版物とするにあたって  
も一定の配慮を働かせ、軍書・小説という意味  
合いを強く打ち出し、『信長記』の拾遺編とす  
ることが制作側の打ち出した書物としての位置  
付けであることを捉えた。前述の、時代の文学  
環境と読者意識を反映させた挿話や虚構性とい  
った改変の要素もこの点において意味をなすも  
のと言える。

以上のように初期小説を対象として、籬島の  
著作形成の要因の解明を行ってきたが、この研  
究成果は、後年の著作への繋がりや方向性、ま  
た同時期の小説作品群との連関を見出すために  
不可欠なものである。また、こうした著作形成  
の分析を蓄積して併せ見ていくにより、時代の  
文壇情勢を緻密に跡付けることが可能になると考  
えている。

本研究の成果をふまえた今後については、  
先ず、主に（1）からの展開として、近世中  
期以降の上方の文学者たちの活動を、その連  
繫の在り方に着目した方法で文芸圏の動態  
を明らかにし、その上でこの結果の作品内容  
形成への投影と文芸的な意義を調査分析す  
ることを試みたいと考えている。また、（1）  
（2）ともに、今後の展開としては、文運東  
漸後の上方における出版物制作の在り方と  
いう観点から、俳諧・小説を中心に多種の文  
学領域にわたり、その動向および後代までの  
影響と意義を具体的な作品分析を重ねなが  
ら解明していくことを主な方針として考え  
ている。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

①藤川玲満、三居庵古音著『俳諧実語教』解説と翻刻、清心語文、査読有、13 号、2011、45-56

②藤川玲満、『信長記拾遺』考、国文、査読有、114 号、2010、12-24

[学会発表] (計 1 件)

①藤川玲満、『信長記拾遺』の形成、ノートルダム清心女子大学日本語日本文学会第 13 回大会、2010 年 7 月 18 日、ノートルダム清心女子大学

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

藤川 玲満 (FUJIKAWA REMAN)

ノートルダム清心女子大学・文学部・講師  
研究者番号：20509674

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし